

—原著論文—

助産士導入に関する夫婦間の意見の相違

石田 貞代 ・ 望月 好子 (小田原高等看護専門学校)

要旨：本研究の目的は、14項目の助産士賛否尺度を用いて、助産士導入に関した夫婦間の意見の相違を項目ごとに明らかにすることである。妊娠中の妻 229名、夫 191名、計 420名から回答が得られ(有効回答率 52.5%)、次のことが明らかになった。

1. 助産士導入の法改正の賛否を問う項目については、夫婦間に有意な差はなかったが、他の5項目で夫婦間に有意な差がみられた。
2. 妻は夫に比べて、助産士援助に肯定的な意見に対して同意するものが、否定的な意見に対しては同意しないものが、有意に多かった。
3. 妻は夫に比べて、女性の助産職を希望するものが有意に多かった。

これらの結果から、助産職への夫婦の見解には性別役割観が反映されていると思われる。この点についてさらに分析が必要である。

キーワード：助産士、助産士賛否尺度、夫婦

はじめに

1994年に保健士資格が導入されて以来、看護職で男性の資格取得が認められないのは助産職だけとなった。いわゆる「助産士」導入に関しては賛否両論あり、結論を見ていない。

1988年以来「助産士」導入に関連した調査は数多く行われているが、妊娠中の夫婦を対象に、助産士導入への賛否とその具体的な理由を、対象者全員に回答してもらう質問紙調査は行われていなかった。また、助産職への性別志向をたずねた質問もなかった¹⁾⁻³⁾。

本研究の目的は、助産士賛否尺度を用いて、助産士導入に関連した夫婦間の意見の相違を項目ごとに明らかにすることである。加えて、助産職に対する性別志向の相違を明らかにすることである。

本研究において「助産士」とは、現行の助産婦資格を将来男性が取得した場合の資格および職業の総称をいう。

方 法

1. 質問紙で用いた助産士賛否尺度

助産士賛否尺度とは、対象者に助産士導入の法改正について賛成、反対の意思とその理由を問う5段階スケールの14項目尺度である。955名を対象に信頼性を測定したところ 係数は0.

93であり、信頼性は高かった¹⁾。

本研究では各尺度の5段階の回答を、「そう思う」「どちらともいえない」「そう思わない」の3段階に集計し直し、項目ごとに、夫婦にどのような意見の相違が見られるかを明らかにするために、²⁾検定を行った。

2. その他の質問項目

出産場面における助産者と医師への性別志向についてたずね、夫婦間の相違について³⁾検定を行った。

3. 対象、期間および調査方法

出産経験のある妊娠27週以降の夫婦を対象に、1994年9月から10月に調査を行った。病院および助産所に通院する夫婦に配布し、郵送法により妻229名(57.3%)、夫191名(47.8%)、計420名(52.5%)から有効回答を得た。

4. 対象者の属性分類

1) 対象者の年齢分類

妻の平均年齢は30.6才(最小値20、最大値43、標準偏差4.2)である。夫の平均年齢は33.0才(最小値21、最大値54、標準偏差5.3)である。

結果

助産士賛否尺度における夫婦間の相違

本尺度の項目ごとの分析結果を図1に示す。

1) 「助産士導入の法改正に賛成すること」「そう思う」のは妻85人(37.1%)、夫69人(36.1%)、「どちらともいえない」のは妻78人(34.1%)、夫55人(28.8%)、「そう思わない」のは妻66人(28.8%)、夫67人(35.1%)で夫婦間に有意な差はなかった。

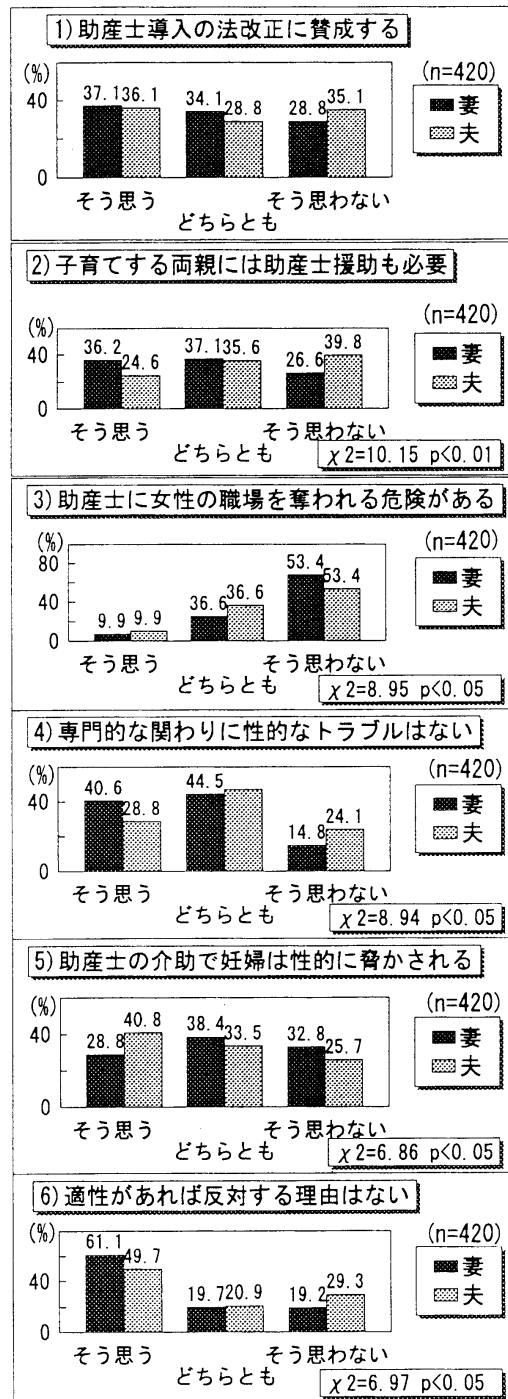


図1 助産士賛否尺度における夫婦間の相違

夫婦間に有意な差があったのは、次の5項目である。

2) 「子育てする両親には助産士の援助も必要」ということに「そう思う」のは妻83人(36.2%)、夫47人(24.6%)、「どちらともいえない」のは妻85人(37.1%)、夫68人(35.6%)、「そう思わない」のは妻61人(26.6%)、夫76人(39.8%)で、妻は夫に比べて「そう思う」が有意に多かった。 $(\chi^2 = 10.15, p < 0.01)$

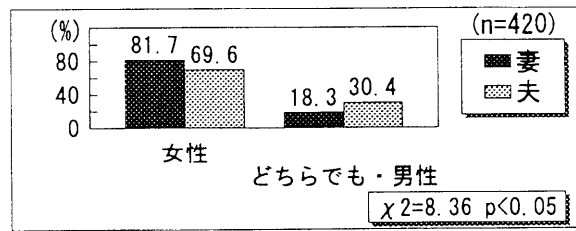


図2 助産職への性別志向への相違

3) 「助産士に女性の職場を奪われる危険がある」ことに「そう思う」のは妻16人(7.0%)、夫19人(9.9%)、「どちらともいえない」のは妻58人(25.3%)、夫70人(36.6%)、「そう思わない」のは妻155人(67.7%)、夫102人(53.4%)で妻、夫とも「そう思わない」が有意に多く、とくに妻が顕著であった。 $(\chi^2 = 8.95, p < 0.05)$

4) 「専門的な関わりに性的なトラブルはない」

ことに「そう思う」のは妻93人(40.6%)、夫55人(28.8%)、「どちらともいえない」のは妻102人(44.5%)、夫90人(47.1%)、「そう思わない」のは妻34人(14.8%)、夫46人(24.1%)で、妻は「そう思う」が有意に多かった。 $(\chi^2 = 8.94, p < 0.05)$ しかし、夫の回答に注目すると「どちらともいえない」が最も多く、「そう思う」と「そう思わない」に大差はなかった。

5) 「助産士の介助で妊婦は性的に脅かされる」ことに「そう思う」のは妻66人(28.8%)、夫78人(40.8%)、「どちらともいえない」のは妻88人(38.4%)、夫64人(33.5%)、「そう思わない」のは妻75人(32.8%)、夫49人(25.7%)で、妻は夫に比べて「そう思う」が有意に少なかった。

$(\chi^2 = 6.86, p < 0.05)$ さらに、夫の回答に注目すると、「そう思う」、「どちらともいえない」、「そう思わない」の順に多く、「そう思う」の方に意見の偏りがみられた。

6) 「適性があれば反対する理由はない」ことに「そう思う」のは、妻140人(61.1%)、夫95人(49.7%)「どちらともいえない」のは妻45人(19.7%)、夫40人(20.9%)、「そう思わない」のは妻44人(19.2%)、夫56人(29.3%)で、妻、夫とも「そう思う」が有意に多く、とくに妻に顕著だった。 $(\chi^2 = 6.97, p < 0.05)$ 全体として妻は夫に比べて、助産士援助に肯定的な意見に対して同意するものが多く、否定的な意見に対しては同意しないものが多かった。

2. 助産職への性別志向の相違

「出産場面での援助者として男女どちらの助産職を選ぶか」の問いに対して「女性」、「どちらでも」、「男性」の3つの選択肢の中から「女性」を選んだものは、妻187人(81.7%)、夫133人(69.6%)で、妻は夫に比べて有意に「女性」を選ぶものが多かった。

$(\chi^2 = 8.36, p < 0.05)$ この結果を図2に示す。

「出産に立ち会う医師として男女のどちらを選ぶか」の問いに対して「男性」、「どちらでも」、「女性」の3つの選択肢の中から「男性」または「どちらでも」を選んだのは、妻121人(52.8%)、夫117人(61.3%)で、有意差はなかった。

つまり妻は夫に比べて女性の助産職を希望するものが有意に多かった。一方医師には有意な性別志向は見られなかった。

・考察

1. 助産士導入に関して

妊娠中の夫婦へ賛否意見とその理由をたずねた調査は過去にもみられるが、賛否の理由は自由回答方式で、賛否理由の夫婦間の相違について分析したものはなかった¹⁾。しかし、過去の調査の自由回答の中には「なりたい人がなればいい」「男女の職業選択は自由である」など、なり手の適性を問わない意見がみられる反面で、「資質が適した人ならいい」「適性がある男性ならいい」などの意見もみられた。

本調査では、なり手に適性があることを条件に助産士を認めてもいい、または適性があれば強く反対はできない、という意見に同意するものが、夫に比べて妻の方に有意に多いことが明らかになった。(ここでいう「適性」とは、助産職にふさわしい資質を意味すると考える。)

助産士に女性の職場を奪われる危険性がある、と思うものは、妻も夫もごくわずかであることが明らかになった。上述の調査でも、これを賛否の理由にあげたものはほとんどみられなかった。したがって、この項目は対象者の賛否を左右するものとはなっていないと考える。

一方、助産士の介助により性的なトラブルや性的な脅かしがあると思うものは、妻に比べて夫に多いことが明らかになった。

大林は助産士反対の理由の1つに、男性の衝動的な不祥事を避けたい、との見解を付け加え、助産士が「性的なトラブル」を起こす可能性について言及している⁵⁾。

しかし、夫は「性的なトラブル」に比べて「性的な脅かし」の可能性の方より同意し、問題意識をもつ傾向があると考えられ、大林の指摘とは多少のズレがあると思われる。今後、これらの言葉が含む詳細な意味について、さらに検討する必要があると思われる。

2. 助産職への性別志向の相違に関して

結果から、妻は医師には性別志向を示さないが、助産職には性別志向を示すものが、夫に比べて多いと考えられた。

一般に、職業には性別役割観が反映されている。女性占有率の高い看護婦は、従来からやさしさ、あたたかさ、細やかさなど、「女らしさ」を期待されている。また家庭での女性の性別役割の延長線上にある職業とされ、社会経済分類では「準専門職」に位置づけられている⁶⁾。助産職も同様である。

一方、男性占有率の高い医師は男性の職業とみなされ、「専門的職業」に区分され、収入や社会的評価の点で前者との間には乖離がみられる⁶⁾。

したがって、男性の産科医に対しては「専門職」であるとの認識から、あまり抵抗を感じないが、助産職に対してはまだ「専門職」としての社会的評価が十分でないために、性別志向を示しているのではないかと考える。

さらに現在の産科領域における男性医師の占める割合(約90%)を考えると、産科医師が男性であることが当然として受け入れられている現状があり、医師に対しては性別志向を示さないと考えられる。

しかしここで、実際のケアの受け手である妻の方が、夫よりも助産士に肯定的なものが多いという結果に着目してみると、妻は、「助産職は専門職」という認識を夫よりも強くもって

るのかもしれない。しかし一方で、「助産職には女性を」希望するものが多いのは、「助産は女性の職業」との意識も根強く、「同性」に援助してほしいという気持ちも強いことが察せられる。

佐々木は、男性が女性並みに家庭や子どもに関わることは、きわめて消極的にしか取り上げられない上に、女性が男性並みに活躍する場合ですら、女性は劣位におかれ、差別性が温存されていることを指摘している。そして、男女の共生には、性別役割分業の枠組を取り去り、個人が役割を選択でき、役割を強制されない自由を獲得できる社会の実現が求められる、と述べている⁷⁾。

「役割を強制されない自由」を得ていくためには、性別役割分業の枠組みがあることによって保護されているものを見直す必要があるのかもしれない。また、意識が変わることにより役割が変化する（性別役割分業の枠組みが崩れる）のと同様に、役割が変化することで意識が変わっていく側面があることにも目を向ける必要があると考える。

助産士導入に関する議論に内在する性別役割観に関しては、さらに分析が必要である。

・引用文献

- 1) 助産婦教育システム研究会, 「助産婦資格の男性への対象拡大」に関する資料, 12-18, 助産婦システム研究会, 1991.
- 2) 全国助産婦教育協議会: 「助産婦資格の男子への対象拡大」に関する調査, 全国助産婦教育協議会, 1991.
- 3) 日本助産婦会助産婦問題検討委員会: 「男性への助産婦資格拡大」に関する調査報告書, 日本助産婦会, 1993.
- 4) 石田貞代: 「助産士」議論の背景に関する研究, 24-28, 1994年度聖路加看護大学大学院修士論文, 1995.
- 5) 大林道子: お産一女と男と, 308, 勁草書房, 1994.
- 6) 牛島千尋: ジェンダーと社会階級, 83-84, 恒星社厚生閣, 1995.
- 7) 日本女性学会学会誌編集委員会編: 女性学 Vol.3, 113-114, 新水社, 1995.

Abstract:

Different Views between Husbands and Wives
Concerning the Introduction of Male Midwives

Sadayo ISHIDA
(University of Shizuoka)

Yoshiko MOCHIZUKI
(Odawara College of Nursig)

The aims of the study were to clarify different views between husbands and wives concerning the introduction of male midwives using approval scale, and to clarify different views concerning the preference for sexuality of midwives.

Answers were returned from 420 people (52.5% response rate) including 229 wives and 191 husbands. The results were as follows:

1. There were no significantly different views between husbands and wives in the item on approval of the idea of male midwives, but there were significantly different views between them in 5 other items.
2. The wives showed not only significantly stronger agreement than the husbands with the items of affirmative idea of male midwives, but also significantly stronger disagreement with the items of negative idea of that.
3. The wives showed significantly more preference for female midwives than the husbands.

The results seemed to suggest that the preference for sexuality was reflected in their views of midwives. We need to fully consider about it.

Key Words : male midwives, approval scale of male midwives, husbands and wives.

